



音
*
楽
*
評

混沌とした現代、音楽でもって
生死の意味を問いかけた

第62回大阪国際フェスティバル2024
大阪フィル×尾高忠明 マーラー「復活」



全ての写真 提供：(公財)朝日新聞文化財団、撮影：樋川智昭



展開部の後半。最後の審判のディエス・イレ(怒りの日)の旋律から、カタストロフの盛大なトゥッティまで最大限の振幅で、まるで宇宙の鳴動のよう。

人生の美しさを振り返るような第2楽章レントラーと、人生の虚しさを映し出すような陰鬱でせわしない第3楽章スケルツォを経て、天国への憧れを歌う第4楽章「原光」メゾソプラノ歌手の加納悦子の歌は浄福までにはもう一つ。

地獄の蓋が開く終楽章。提示部終わりの高揚で、大阪フィルのホルンをはじめとする金管群とオーケストラ全体が、実に輝かしく雄大なクライマックスを聴かせる。展開部の終わりでは、第1楽章と呼応するカタストロフから、再現部への突入が凄まじい。尾高は渾身の追い込みで、ギリギリの勝負をかける。静謐に始まる「復活せよ」の抑えた合唱(大阪フィルハーモニー合唱団)好演。そしてソプラノ歌手の森谷真理と加納の美しい二重唱以降、合唱の「翼」のフガートから、「復活」の祈りの絶唱。「生きるために死ぬのだ!」。大きな感動が聴衆の胸に響いた。しかし同時に、戦争の時代の「生」と「死」の意味を、一人一人に問いかけずにはおかなかっただろう。

(8月2日、フェスティバルホール、横原千史)

種のプログラムがある。その点では交響曲第一番「巨人」と似ている。第1楽章「葬礼」は爆発的な序奏で幕開け、葬送行進が粛々と進む。対比としての歌の第2主題は、尾高の解釈では、弱音の極みで、とてもきれいだ。尾高の表現の頂点はい

マーラーの交響曲第2番「復活」は、稀ではないが、演奏頻度は多くない。大阪フィルハーモニー交響楽団にとっては10年ぶり、指揮者の尾高忠明にとっては17年ぶりという。この曲には「葬礼」で始まり、「復活」で終わる交響詩のような、ある